

ワークショップ

「中医学的総合診療 症例検討会」事前登録のお願い

◎企画 中国伝統医学の臨床推論を経験する

日時：2016 年9月18日（日） 13:00～15:00

会場：タワーホール船堀 4階 研修室

企画提供：木村朗子（ともともクリニック院長）

石川家明（TOMOTOMO代表；友と共に学ぶ東西両医学研修の会）

定員：30 名（30名に達し次第、応募を締め切ります）

参加方法：日本中医学会HPの第6回学術総会概要の表から「事前申し込みはこちらから」を選んで下さい。<http://jtcma.org/scientific-meeting/index.html>

※参加するイベント(2)：「ワークショップ(症例検討会)に参加する」にチェックしてください。

【ワークショップの内容】

世界中で医療教育の議論と研究が盛んになり、臨床推論の技法が教育現場に導入されてきています。日本の医療教育も「臨床推論」一色に塗り替えられたかのようです。最近では看護師や薬剤師にも「臨床推論」は広がっています。

「臨床推論」は、まさに熟練者の頭の構造を解析して、問診をメインに身体診察をサブにして、できるだけ短時間で確率の高い鑑別診断に導く、具体的な方法です。すべての医療者が習得すべきで技法であると言われています。

簡単な初歩的な症例を提示して、中医学と「臨床推論」の親和性を体験してみてください。きっと、中医学の先見性に驚くことでしょう。

★筆者らの「中医総合診療症例検討会」の活動や症例は日本中医学会HPをご覧ください。

<http://jtcma.org/activities/sougousinryou.html>

【開催の目的】

プライマリケアや総合診療の教育現場には「まだ教科書を信じているのか」という後輩を諭す教育的言説がある。教科書は便利であるが、標準的であればあるほど、臨床実態と解離が生じてくるからである。なかでも困るのは、臨床の思考手順はマルチタスクなのだが、それを教科書に記述すると時系列に書かざるを得ないことである。そもそも、教科書的記述には順序に従って書かざるを得ないのであって、それは臨床の順番と違うことが多々起こる。例えば、しびれは末梢から診る方が誤診は少ないが、標準的教科書であれば中枢から説き起こさなければならないのである。

標準的教科書を生かすのは実践的ロジックと臨床的洞察のみであり、これは教科書だけを見ている人には決して分からない。実践的ロジックと臨床的洞察はともに臨床現場でのみで研鑽できることである。さらに、教科書はいくら頑張っても実践のすべてを書き尽くすことはできない。「教科書の知識」がイコール「臨床現場の知」ではないことは、すでに臨床家は知ることとなっている。

そこで世界の臨床教育は大きな変容を遂げてきた。教科書の知識伝達型から、学習者参加型のプロブレムベースラーニング (Problem Based Learning) に変わってきた。一方、中国に起源する学問の多くがHow to方式、すなわち「如何により良く実践するか」に重きが置かれる実践知が基礎となっている学問形態である。「証立て」は教科書やガイドラインの記述的要素の適合のみではなく、陰陽相対的な概念を臨床に応用させるHow to方式に他ならない。また、西洋医学の診断基準や分類基準による診断法とは違い、すでに患者が内包しているであろう相対的な「すでにあなたは病気だ」を様々な所見を通して「発見する方法」である。つまり、中医学では教科書記述から演繹的に結論に向けて当てはめようとするアプローチはそもそも似つかわしくない。それでも、教科書は作らなければならない。世界に類のない「証」の診断学を「如何により良く診断するか」を一義的にして果敢に教科書作りをしてきた現行中医学に敬意を表したい。またその先達の慧眼に注視し続けなければ、伝統医学の継承は成らないであろう。

弁証論治の診断推論方法がプライマリケアや総合診療の中核ツールである「臨床推論」と思考構造が似ていることを比較検討して、現行中医学が臨床ツールとして時代にさきがけていることを示していきたい。